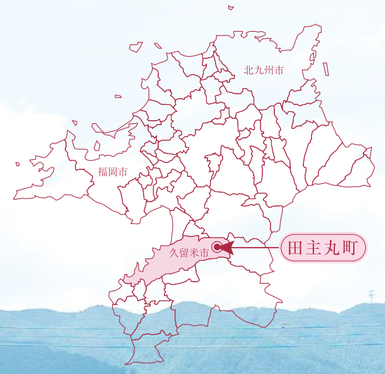
丹念に備えられた
自ら創る未来へのデザイン



特集
無花果
井上正隆
文：梶原圭三
写真：川上和禎

平成の出会い

その日は朝からそわそわしていた。
3 週間ほど前に一通の講演依頼のメールが届いた。福岡県農林水産部からのそのメールには、『ふくおかエコ農産物認証』を取得している生産者の前で、ふくおか食べる通信の取り組み内容を発表してほしい、と書いてあった。『ふくおかエコ農産物認証』とは、農薬と化学肥料の使用を福岡県基準の半分以下で生産された農産物に対して、県がお墨付きを与えているものである。つまり、福岡県内のこだわりの生産者が数多く集まる前での講演依頼である。基本的に来るもの拒まずのスタンスである為、断る理由は無い。加えて、どのような生産者に会えるのかワクワクする気持ちも抑えきれなかった。

平成も残りわずかとなった 2019 年 4 月 26 日。福岡県各地から集まった錚々たる生産者 30 数名を前にして、生産者と消費者のつながりを表す『知産知消』の世界観を語った。講演前に食べる通信の認知率は 10%程度であったものの、講演後には多くの生産者がわざわざ名刺交換に来て頂いた。身にあまる光栄であった。

その中に、一見、農家っぽくない雰囲気を醸し出している男性がいた。『株式会社 農業都市デザインシステム研究所　代表取締役 井上正隆』と書かれた名刺を受け取った私は「コンサル関係の方ですか?」と聞いた記憶がある。「いいえ、農家です。いちじくを無農薬で作っています」。その一言で私の興味は加速度的に急上昇した。「いちじくを無農薬ですか?本当にできるんですか?」。「はい、できます。よかったら農園に遊びに来てください」。そう言い残し、男性は足早に会場を後にした。

我楽しう生まる

福岡県久留米市田主丸町。久留米市は人口約 30 万人の福岡県第 3 の都市である。久留米市出身の有名人も多く、一世を風靡したチェッカーズや松田聖子から、吉田羊や田中麗奈といった実力派女優、最近では若者に人気のシンガーソングライター、家入レオなどが活躍している。2005 年の平成の大合併によって近隣の町を編入、その一つが旧浮羽郡田主丸町であった。『たぬしまる』と読むのだが、地元では『たのしまる』と呼ぶ人が多い。田主丸の語源が『我楽しう生まる』から来ていると伝えられている。北に筑後川、南に耳納連山を頂き、風光明媚な田園風景が広がる。植木栽培やぶどう栽培が盛んで、巨峰発祥の地と言われている。『株式会社農業都市デザインシステム研究所』、通称『いのうえ農園』は耳納連山の麓、益生田（ますおだ）という、整然と区画整備された土地でいちじくを栽培している。いちじくハウス 7 棟の周囲は綺麗に整備され、植木や芝生が植え込まれている。加工所を兼ねた事務所はモダンな装いで、一見するとカフェのような佇まいである。観光農園のようなその敷地から、晴れた日に一望できる耳納連山の景色は素晴らしく、思いっきり深呼吸したくなる開放感に溢れている。世間がコロナウイルスで混乱している事を忘れさせてくれるほどだ。いのうえ農園の園主である井上正隆さん（71 歳）は、今から 11 年前の 60 歳の時この地で就農した。

第 2 の人生の始まり

1949 年（昭和 24 年）、井上さんは久留米市で生を受けた。いわゆる団塊の世代である。この年は過去最多の出生数で、およそ 270 万人が生を受けた。（ちなみに 2019 年の出生数はおよそ 87 万人と当時の 3 分の 1 程度である。）この団塊の世代は高度経済成長期やバブル期を経験し、右肩上がりの日本経済を牽引してきた世代である。戦後の貧しさからの脱却をバネに経済的な豊かさを目指し、がむしゃらに働いてきた。井上さんも久留米市を創業の地とする大手タイヤメーカーで営業としてがむしゃらに働いた。人の 2 倍は働いたという。夜の接待や休日のゴルフは当たり前。国内だけに限らず海外にも赴き見聞を広めた。

そんな井上さんも定年を意識する年齢に差しかかっていた。50 代後半の頃、会社からは 65 歳までの定年延長を打診された。ところが井上さんは 60 歳での定年を決め、第 2 の人生を送る事を会社側に伝えた。井上さんにはある想いがあった。出張で足を運んだ九州各地の食の美味しさに感動したという。それは素材そのものの美味しさであった。食や農の魅力に魅了され、自分でも作ってみたいと思うようになった。一般的に、このような意識の変化や高揚は珍しい事ではない。定年を期に田舎に引っ越し、農作業を趣味としながら悠々自適な生活を送ろうとする人は一定数存在する。事実、そのような人たち向けの移住促進サービスを手がけている自治体は少なくない。ところが井上さんは違った。「そこに生き甲斐はあるのか?」そう自問自答したという。

60 歳が近づいているとはいえその先もまだ長い。幸いにも健康で頭もしっかりしている。井上さんのチャレンジ精神がムクムクと頭をもたげてきた。残りの人生を農業にかけてみる。58 歳の時にそう決断した。

決断した井上さんは就農への準備に余念が無かった。58 歳から定年の 60 歳までの 2 年間を使って、農地の選定、事業構想、栽培方針など徐々に練り上げていった。そして、「よそ者が農地を買うには法人化しなければ難しかったんです」と、会社設立するに至った。ほどなくして現在の農地を取得。定年までの 2 年間を就農準備に充てた事で、2009 年（平成 21 年）、60 歳の定年を迎えた井上さんは即就農する事ができた。

とよみつひめとの出会い

“とよみつひめ”とは、福岡県農業総合試験場豊前分場（福岡県行橋市）で新たに品種育成され、2006 年に品種登録された福岡県オリジナルのいちじくの品種名である。井上さんは、栽培品目を決める上で“ブランド化できる事”、“初年度から売上を計上できる事”の 2 点を重視した。野菜に比べ果物は嗜好性が高くブランド化しやすい傾向にある。一方、柿や梨、ぶどうなどの果樹は苗木が生長し果実として収穫できるまで数年かかる。そこで、井上さんが注目したのがとよみつひめだった。当時、とよみつひめの生産は少なく、それ自体が希少であった。井上さんは久留米から車で 2 時間近くかけて、行橋の農業総合試験場に通った。そこで指導員の指導の元、徹底的にとよみつひめの栽培について学んだ。そこで学ぶ栽培法はいわゆる慣行栽培と言われる、農薬も化学肥料も使用する一般的な栽培方法だが、井上さんはあえて、農薬も化学肥料も使用しない栽培法に挑戦する決意をした。「どうせやるなら、誰もやった事のない事をやろうと思いました」。井上さんのチャレンジ精神がまたもや頭をもたげた。

まず、手をつけたのが土作り。購入した農地には、大小様々な石がゴロゴロ埋まっていた。このような土地ではとよみつひめは育ちにくいという。「土壌調査を行い、成分データを取りました」。その結果、酸性に偏っていた土壌をアルカリ性に近づけなければならない事がわかったという。必要な堆肥や石灰等を少しずつ土に混ぜながら、成分データを測っていった。非常に根気の要る作業だったという。「足し算は効くんですが、引き算はできないんですよ」。その難しさを井上さんはこう表現した。一気に堆肥や石灰を混ぜるとアルカリ性が強まりすぎ、それを戻す事は極めて困難という。つまり徐々に足していく事で成分を調整していった。初年度はハウス 1 棟で栽培を開始。指導員からの指導通り基本を忠実に実践した事もあり初年度から美味しい無農薬のとよみつひめが出来たという。「ビギナーズラックです」井上さんは初年度の出来をこう謙遜する。一方で、基本に忠実だった事が結果的には良かったとも述懐した。

収穫したとよみつひめは、友人や親戚、前職の知人などに配った。趣味のゴルフでの人脈を生かして、ゴルフコンペの景品に採用してもらうなど工夫した。その結果、「井上さんのいちじくは美味い」と評判となり、口コミが広がったという。「おかげさまで安売りせずとも売れる感触を少しだけ得ました」。この後、井上さんは基本に忠実に栽培を続けながら、さらなる付加価値を高める為の手を打っていった。

六次産業総合化事業計画

2011 年、国は農業の六次産業化を推進する為、六次産業化法を制定。これに基づき、農林水産事業者は六次産業への総合化事業計画を提出し認定される事で、様々な支援が受けられる事になった。六次産業化とは、農産物の生産、加工、販売を農業従事者が一手に行う事である。元々、自らいちじくの生産と販売を行っていた井上さんは、加工品についても視野に入れていた事からこの制度は渡りに船であった。早速、就農 2 年目の井上さんは、九州農政局で開催された説明会に参加した。そこで担当官から言われた一言を今でも覚えているという。「井上さん、農業はそげん簡単なもんじゃありませんよ」。井上さんのチャレンジ精神に火がついた。認定を取るべく、事業計画の策定に取り掛かった。事業計画は単に数字合わせではなく、極めて具体的なものが求められた。何を、どこに、どうやって販売するのか。その蓋然性が極めて重要であった。井上さんはこの事業計画を書き上げる事で、自分の就農の想いまで遡り、想いを実現する為の道標をその計画書に落とし込んでいった。「5 年間の事業計画を書き上げましたよ」。井上さんは胸を張る。その甲斐あって、計画書は 2011 年 5 月、農林水産大臣から認定された。井上さんは、この事業計画をかき上げた成果をこう語る。「計画なので必ずしもその通りに行くとは限りません。ただ、どこに向かっていて、今がどの辺りにいるのか。何がうまくいっていて、何が滞っているのか。それによって次に何をしなければならないのか。これが明確になりました。当時、農業では素人の私が、進むべき道が見えたのが大きいです」。認定によって得た支援策を活用しながら、徐々に栽培面積を拡大し、販路を拡大していった。

farmer's inside storys and delicious delicious foods world.